

現代詩 ● 佳作⑤

さやかに
通せんぼする
いたずらな子のもののように
学校に
劇場に
百貨店に

はやかに
しめやかに
滑り込んだ
日常を楽しむように
夜の歓楽街に
パチンコ店に
スポーツジムに

講評

新型コロナウイルス関連の詩。だが、どこにもコロナという名称がないところがいい。彼女という言葉を使い、事実のみを記す。そして、最悪の脅威に対して、「すこやかに」という自分の言葉で揶揄(やゆ)している。各連最初の「～かに」にも工夫が見られた。(審査員・金井 雄二)

2020 春

みや 作

本名・宮原純
みやはら
じゅん。1965年生まれ。公務員。川崎市。

拡大する

急速な雨雲のよう

高齢者施設に
医療機関に
人の心に

初夏を迎える

彼女は消えたのか

いいえ

ここにいるよ

いつそう

すくやかに

彼女はやつてきた

最初は

親切な観光客のように
ひそやかに
しめやかに
滑り込んだ
日常を楽しむように
夜の歓楽街に
パチンコ店に
スポーツジムに

さやかに
通せんぼする
いたずらな子のもののように
学校に
劇場に
百貨店に

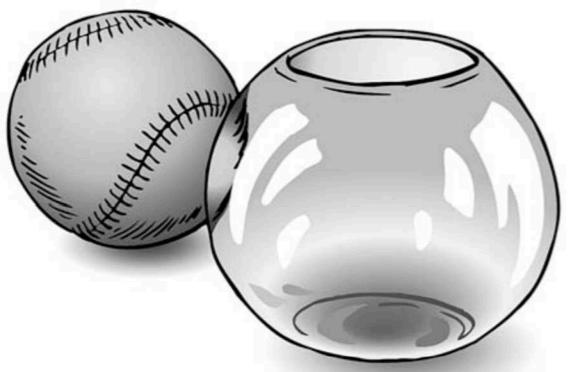
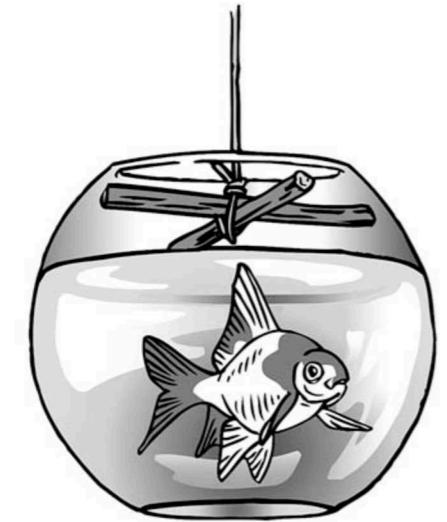
はやかに
しめやかに
滑り込んだ
日常を楽しむように
夜の歓楽街に
パチンコ店に
スポーツジムに

第50回
神奈川新聞

文芸コンクール

作品の掲載に当たっては、
原文通りを原則としています。
入選作は順次掲載します。

次回は23日の予定



浜中 せつお 画

短編小説 ● 佳作⑤

来店を告げるドアのベルの音が小さく鳴り、レジの中で作業していた僕は少し背筋を止す。「今日はグッと暑くなりましたね、二十五度近いです」とある初老の男性客がぐるりと小さな店内を一周したのを見計らって声をかける。天気の話なんかするなよ、どこにでもいるつまり人間だと思われる、と父にはよく言われたものだが、この職業には実は天気が密接に関わっていることを知った。夏には涼しげなガラスが売れ、冬には暖かみのあるランプや火鉢が売れるのだ。実用的に使うわけではないのにねもしろい。

「これは何ですか?」「これは何ですか?」男性も例に漏れず、薄い球体のガラスを持つと言った。「金魚玉ですよ、昔は縁日でずっと金魚を入れてひもでぶら下げていたんです。今のビニール袋のようなんのですかね?」「しかし、ビニールの代わりには今は使えないですね」と男性はその華奢なガラスの表面を人差し指でついた。

「これは何ですか?」

僕を試すように見た。

それならば、と僕は金魚玉を手に持つて店の外に出ると、近くに生えていた枝をペキっと折った。それを入れ葉を浮かべて店に戻ると、古い小間ダ

ノスの上に載せた。ゆるゆると表面が波打ったガラ

スが、作為的ない模様を浮かべ、飾らない美しさを放つ。

「こうすると経になる感じよ。これが縁に色のついた金魚鉢だとはほんまにませんね、波打った部分や分厚いガラスが邪魔をします」

すると、男性客はなるほどと言つ顔をして、すぐ

に「もういいよ」と言った。

「八千円ですか?」「八千円ですか?」

おおよそと値段を口にする。八千円というのは、自分で自分の店の商品をぐるりと見渡してみると、こ

んな店が果たして骨董屋と呼べるのか、愚にもつ

かないガラフタを並べて遊んでいるだけなんじゃな

いか、という思いが頭をぎこちる。

そんな僕の胸中には氣付かずに、男性はいつも簡

便に想い出を丁寧に梱包している。誰かの丸い想い出を丁寧に梱包する。男性はレジの裏に置いてある

ボルを指す。彼は本当に欲しいのはあのボルなんですがね。

最近引退したメジャーリーガーのサインですよね。しかもすごいぶんと古い。彼は途中でサインが変わっていますから。このぎこちないサインは三年目まで

商品を取り扱うようにしていとも、父の表情はいつも切羽詰

りにならぬことを考えながら、誰かの丸い想い出を丁寧に梱包している。誰かの丸い想い出を丁寧に梱包する。男性はレジの裏に置いてあるボルを指す。彼は本当に欲しいのはあのボルなんですがね。

彼は本当に欲しいのはあのボルなんですがね。

彼は本当に欲しいのはあのボルなんですがね。